

## 平成 27 年度 学校経営計画及び学校評価

## 1 めざす学校像

しっかりと生徒と向き合い、信頼に基づいた教育活動を展開することで、生徒の「意欲」を育て「力」をつける学校をめざす。

- 互いに信頼で結ばれた関係を作り上げ、その中で豊かな人間性が育成される学校をめざす。
- 学力はもとより人間関係形成能力等も含めた総合的な「人間力」をつけることのできる学校をめざす。
- 総合選択制の長所を生かして、生徒の多様性に応じた教育活動を展開する。

## 2 中期的目標

## 1 進路実現をはかる学力の育成

(1) 「わかる授業」をめざし、創意工夫の授業改革に取り組む。

ア. ICT機器・視聴覚機材を取り入れ、教材や指導法の工夫を図り、「わかる授業」「魅力ある授業」を創出する。

イ. 校種を超えた授業公開・研究授業を行い、授業アンケート等を活用して積極的に授業改善を図る。

※学校教育自己診断「授業に工夫をしている」の項目の肯定率(H26年度 56%)を、H29年度には65%以上にする。

(2) 「確かな学力」の定着から進路実現できる学力の育成をはかる。

ア. 学力生活実態調査を年2回実施し、学力の定着度を測定するとともに、学力向上プラン策定の資料とする。

イ. 生徒が進路へ積極的に取り組むモチベーションを高める取り組みをおこなう。

※学力生活実態調査3年時の中位以上ランク率(H26年度 20%)をH29年度には30%にする。

※進路先に対する満足度アンケートをおこない、毎年肯定的回答80%以上を維持する。

(3) エリアの教育内容を充実させる。

ア. 生徒の諸能力(専門的な知識・自分で考える力・自分を表現する力・プレゼンテーション能力・コミュニケーション能力・理解力・物事を調べる力)の向上を目標としてエリア授業の充実を図る。

イ. エリア発表会を充実させることで、目的意識を持ってエリア授業に臨む姿勢を作るとともに、達成感を与える。

※3年生対象のアンケートでのエリア教育に対する満足度(H26年度は73%)を、H29年度には80%にする。

※3年生対象のアンケートで上記諸能力が果たしたかどうかの肯定的回答(H26年度は70%)をH29年度までに75%にする。

## 2 豊かな人間性と社会で生き抜く力の育成

(1) 国際社会に通用するコミュニケーション力のある人材を育成する。

ア. 海外語学研修を校内行事に位置づけ、参加を促進する。

イ. 海外の学校との学校交流を行う。

(2) 規範意識と環境意識を育成する。

ア. よりよく社会で生きるために必要な力の育成として、生徒指導の充実を図る。

イ. 校内環境の向上と、生徒の美化意識の向上を図る。

ウ. 入学当初のガイダンス・クラス開きを充実させ、安心できる居場所づくり・学校生活への定着の促進をおこなう。

※学校教育自己診断「学校へ行くのが楽しい」の項目の肯定率(H26年度 67%)を、H29年度には75%以上にする。

(3) 部活動の活性化を図る。

ア. 1年生を中心に入部運動を推進し、加入率の向上をはかる。

イ. 部活動の活躍状況を地域に発信する。

※部活動の加入率(26年度 60%)を平成29年度までに65%にする。

(4) 共生推進教室の取り組みを生かし、生徒のコミュニケーション能力等の育成を図る。

ア. 「共に学び共に育つ」の理念を実現すべく、共生推進教室のシステムを確立する。

イ. 共生推進の生徒が、他の生徒や地域の人々と交流する機会をより多く設定する。

※H29年度までに共生推進の生徒・保護者向けのアンケートで満足度80%を実現する。

## 3 地域と連携し、社会に貢献する教育活動の展開

(1) ユネスコスクールの活動を基盤に、社会参画意識の育成を図る。

ア. 「ESDパスポート」を活用して、生徒の社会貢献活動への参加を促進する。

イ. 社会貢献活動をとおして自尊感情・自己有用感の向上を図る。

(2) 地元中学校、地域団体と連携し、中高連携体制を強化する。

ア. 地元中学と連絡会議を持ち、連携して学力保障の問題に取り組む。

イ. 地域と連携した実習を積極的に行い、コミュニケーション能力等の育成を図るとともに、地域行事に積極的に参加・協力し地域貢献の実績をあげる。

ウ. 支援学校、市内の高校・小中学校、地域コミュニティ、人権団体等との相互交流の機会を深め、地域ネットワーク事業を拡大する。

※学校教育自己診断の地域との連携に関する2項目の平均(H26年度 58%)を、H29年度までに70%にする。

## 【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 27 年 11 月実施分]	学校協議会からの意見
<p><b>【学習指導等】</b></p> <p>・今年度は公開授業や研究授業の機会を増やした結果、「他の先生が授業を見に来る」という問いに対する肯定率が54%から74%に向上した。視聴覚機器やコンピューターの活用については51%から65%へ、教え方の工夫については47%から59%へ、授業のわかりやすさについては46%から60%へと向上した。一方で授業に対する満足度が、学力の向上には結びついていない。これは家庭学習の不足に起因していると考えられる。家庭学習をどのように増やすかが課題となる。</p> <p><b>【生徒指導等】</b></p> <p>・生徒指導に力を入れているかという問いには80%以上が肯定している。一方で先生は意見を聞いてくれるかという問いには59%の肯定にとどまる。安易な妥協はできないが、生徒の理解と納得が得られるよう生徒指導の意義をしっかりと説明する必要がある。</p> <p><b>【学校運営】</b></p> <p>・分掌、学年間の連携に対する肯定率が28%にとどまる。参加型研修などを通じてコミュニケーションの機会を増やしたい。</p>	<p>第1回 (6/12)</p> <p>○27年度学校経営計画について</p> <p>・「学力の向上」においては生徒に勉強の仕方をきっちり教えることが重要。どうすれば成績が上がるか、どうすればやる気が起こるのかということが必要。</p> <p>・普段の授業ではしっかりやっているのに定期考査では実力を発揮できない生徒がいる。普段の取り組みを評価してやってほしい。</p> <p>○その他</p> <p>・PTAと生徒の交流会を開いてほしい。</p> <p>第2回 (1/26)</p> <p>○27年度学校評価について</p> <p>・相互授業見学に際し、評価シートや改善シートのようなものを出すようにしてはどうか。</p> <p>・すべての項目を向上させるのは難しいので、焦点を絞り予算を投下すべし。</p> <p>○学校教育自己診断結果について</p> <p>・自尊感情をはかるような質問項目を設定されたい。</p> <p>第3回 (2/27)</p> <p>・自習室は間仕切りするなど工夫して勉強しやすい環境づくりをされたい。</p>

## 3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 進路実現をはかる学力の育成	<p>(1)「わかる授業」をめざした授業改革 ア 授業指導方法の工夫 イ 校種を超えた授業公開・研究授業</p> <p>(2) 進路実現できる学力の育成 ア 学力生活実態調査の実施 イ 生徒が進路へ積極的に取り組むモチベーションを高める取り組み</p> <p>(3)エリアの充実 イ・エリア発表会</p>	<p>(1) ア・経験の少ない教員を中心にICT等の情報機器や視聴覚機器を活用した授業づくりをめざした勉強会を開催し、スキルアップをはかる。 イ・授業力向上にかかる組織を立ち上げ、1・2学期にそれぞれ1回ずつ授業公開・研究授業実施、ビデオ機材等を活用するなど工夫を凝らしたものにする。 ・小中学校の公開授業や研究授業等に教員を派遣し、異校種間での授業研究を進める。</p> <p>(2) ア・学力生活実態調査を4月と10月に実施し、前年度比も含めて学力定着度を測定・分析を行い、学校協議会に報告する。 イ・1,2年生全員の希望進路別の学校見学会・職業別の説明会を行う。 ・私立大学の有名講師を招き、進路実現のための人材育成プロジェクト「夢実塾」を月2回開催し、志の高い生徒を育成し、進路実現をはかる。</p> <p>(3) イ・つばさコレクション(エリア発表会)を立命館大学で開催し、各エリアからプレゼンテーションを行い、コミュニケーション力の育成をはかる。</p>	<p>(1) ア・学校教育自己診断「授業に工夫をしている」の項目の肯定率(H26年度56%)を、60%にする。 イ・学校教育自己診断の「他の先生が授業を見学に来る」の項目の肯定率を60%(H26年度54%) ・小中学校の授業に参加する教員25人以上(H26年度20人)</p> <p>(2) ア・学力生活実態調査の上位率前年度比で5%上昇。 ・中堅私大の推薦入試合格者を10人以上(H26年度5人)にする。 イ・学校教育自己診断の進路が「イグナス」の項目の肯定的回答70%以上(H26年度67%) ・夢実塾の塾生を10人。</p> <p>(3) イ・普選アンケートのプレゼン力の項目の肯定的回答を65%以上(H26年度61%)</p>	<p>(1) ア・ICT等の情報機器を活用した授業見学を行い、ICTを活用する授業は増加傾向にはあるが、学校教育自己診断の授業工夫への肯定率は59%にとどまった。次年度はICTを活用した研究授業を開催したい。(△) イ・学力保障委員会を立ち上げ、教員間授業公開週間を設け一人2回以上の授業見学を行うとともに、研究協議も2回実施した。学校教育自己診断の授業見学に関する肯定率は74%に上昇した。次年度も継続したい。(◎)</p> <p>(2) ア・学力生活実態調査上位層比率は12%下降した。原因を分析し、学力向上に向けた対策を講じたい。(△) ・中堅私大の推薦入試合格者は3名にとどまる。次年度は学力上位層を伸ばすため、外部講師の講習参加を強化したい。(△)</p> <p>イ・進路別学校見学会と職業別説明会は年間2回開催し、1・2年生全員に参加させた。学校教育自己診断の進路が「イグナス」の項目の肯定的回答は70%を達成した(○) ・「夢実塾」の参加生徒は当初は10人を超えていたが、次第に減少した。形態の見直しが必要である。(△)</p> <p>(3)イ・プレゼン力の肯定率は63%にとどまる。次年度は各種発表会の企画を増やしたい(△)</p>
2 豊かな人間性と社会で生き抜く力の育成	<p>(1)国際社会に通用するコミュニケーション力のある人材の育成 ア・海外語学研修の参加促進 イ・海外の学校の交流受け入れ</p> <p>(2)規範意識と環境意識の育成 ア・生徒指導の充実 イ・美化意識の向上</p> <p>(3)部活動の活性化 ア・部活動加入率の向上</p> <p>(4)共生推進教室の取組み</p>	<p>(1) ア・近隣の高校と提携してオーストラリア国際交流研修を企画し、参加を促進する。 イ・国際交流委員会と生徒会が中心になり、海外の学校を受け入れ、歓迎行事や体験授業をつうじて友好関係を築く。</p> <p>(2) ア・遅刻多数の生徒に対して、早朝登校・居残り指導を行うなどして生活習慣の確立を促し、遅刻者数の減少をめざす。 ・行政・警察・自動車学校と連携して「自転車免許講習」を実施し、3学年全体で「自転車運転免許」を発行し、自転車通学のマナーの向上を図る。 イ・美化キャンペーンを2回実施し、美化委員がごみの分別活動と広報活動を展開する一方、保健委員が全クラスの清掃と分別を総点検し、優秀クラスを顕彰する。</p> <p>(3) ア・体験入部デーを二日設けて、複数のクラブを体験させ、さらに1か月間仮入部期間を設定して新入生の入部を強く促す。</p> <p>(4) ア・共生推進教室の3学年の実習先を確保し、とりかい高等支援学校と連携して進路先を確保する。</p>	<p>(1) ア・国際交流研修の参加者を4人以上とする。 イ・海外の学校を受け入れ、事後のアンケートにおいて交流生徒の満足度を80%以上とする。</p> <p>(2) ア・1・2学期の遅刻数を一人当たり13回(26年度15回)にする。 ・「自転車運転免許証」の取得率を95%以上にする。 イ・総点検で20P(21点満点)以上のクラスを5クラス以上とする。</p> <p>(3) ア・1年生の入部率を67%(H26年度64%)に引き上げる。</p> <p>(4) ア・3年生全員の進路実現</p>	<p>(1) ア・初のオーストラリア研修には1年4人、2年4人の計8人が参加し3校のうち最大となった。(◎) イ・12月に台湾竹東高級中学校訪日団36人が来校、全生徒およそ半数が交流行事に関わった。次年度は初の海外修学旅行で台湾を訪れ、交流を深化させたい。(○)</p> <p>(2) ア・遅刻数は昨年度比31%減。取組みを継続する。(◎) ・自転車免許講習は1年生全員及び2・3年生の未受講者を対象に実施し、免許証取得率は98%に達し、交通違反や事故はほとんど起こっていない。次年度は雨合羽の着用指導を徹底したい。(○) イ・美化意識が高まり、第1回美化キャンペーンでは6クラスが20P以上、第2回は10クラスが受賞した。次年度もこの取組みを継続する。(○)</p> <p>(3) ア・1年生の入部率は過去最高の74%に上昇した。次年度は女子の運動部入部率を引き上げたい。(◎)</p> <p>(4) ア・3名とも希望の進路を実現。次年度は実習先を開拓し、より多様な業種を確保したい。(○)</p>
3 地域と連携し、社会に貢献する教育活動の展開	<p>(1)ユネスコスクールの活動を基盤にした、社会参画意識の育成 ア 「ESDパスポート」を活用した社会貢献活動の促進 イ 自尊感情・自己有用感の向上</p> <p>(2)地元中学校、地域団体と連携し、中高連携体制を強化 ア 地元中学との連絡会議の充実。 イ 地域と連携した実習、及び地域貢献 ウ・地域ネットワークの拡大</p>	<p>(1) ア・「ESDパスポート」を活用して、生徒に具体的な目標を持たせ、達成感を味わわせることによって、社会貢献活動への参加を促進する。 イ・東日本大震災の支援活動・募金運動・茨木地域清掃活動等の社会貢献活動をより多く設定し生徒の参加を促進させることで自尊感情・自己有用感の向上を図る。</p> <p>(2) ア・地元中学と連絡会議を持ち、連携して学力保障・中退の問題に取り組む。 ・地元中学校向け出前進路学活・出前授業を拡大実施する。 イ・エリア授業や自由選択科目で地域と連携した実習を積極的に行い、コミュニケーション能力等の育成を図るとともに、部活動・生徒会・ボランティアの活動を通じて地域イベントに積極的に参加・協力する。 ウ・地元小中高の各学校や地域団体に初任者や経験の少ない教員を派遣しネットワークを拡大する。</p>	<p>(1) ア・「ESDパスポート」のユネスコ協会連盟からの表彰認定(30ボランティア以上獲得)30名以上 イ・学校教育自己診断の社会貢献の項目の肯定的回答70%以上(H26年度67%)</p> <p>(2) ア・地元5中学の連絡会を年間4回開催。 ・出前進路学活・出前授業合わせてのべ10校以上に講師を派遣する。 イ・学校教育自己診断「地域とかわる機会がある」の項目60%以上(H26年度49%) ウ・地域の会合・イベントに20人以上が参加。</p>	<p>(1) ア・支援学校との交流、福祉施設訪問、地域行事等への参加者が増加し、ESDパスポート社会貢献認定証の獲得者は42名に達した。次年度は新たな分野にも進出したい(◎) イ・震災支援で東北を訪れた生徒は62名で昨年度の約2倍増。社会貢献の項目の肯定率は74%に上昇した。次年度は2チームに分け、より多くの生徒の参加を促したい。(○)</p> <p>(2) ア・連絡会は計画通り4回開催した。次年度は共生推進担当者も出席させ、中学校との連携を深めたい。(○) ・出前進路学活は15の中学校に51人の講師を派遣し、好評を博した。次年度も取組みを継続する。(◎) イ・地域との関わりについての肯定率は昨年度並みの51%にとどまった。次年度は連携先を開拓したい。(△) ウ・地域や地元小中学校等の公開授業や人権行事に26名が参加。次年度は地元小中学校に呼びかけ、連携を強化したい。(○)</p>